



生 命 の 樹

高 見 順

Roman Books



生命の樹

210 円

昭和37年 2月20日 第1刷発行
昭和40年 7月10日 第3刷発行

著 者 高 見 順
発行者 野 間 省 一
印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
電話 東京 (942)1111 (大代表)
振 替 東 京 3 9 3 0

© 高見順 昭和三十八年





此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongb.com

生 命 の 樹

高 見 順

Roman Books



生 命 の 樹

210 円

昭和37年 2月20日 第1刷発行
昭和40年 7月10日 第3刷発行

著 者 高 見 順
発行者 野 間 省 一
印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 株 式 会 社 大 進 堂
発行所 株 式 会 社 講 談 社
東京都文京区音羽町3ノ19
電話 東京 (942)1111 (大代表)
振 替 東 京 3 9 3 0

© 高見順 昭和三十八年

生
命
の
樹

第一章

鎌倉の僕の家へ由美子が電話をかけてきたのは、これが初めてである。おつつけ一年になろうという由美子とのつきあいで、こうして直接、電話してくるなどというのは、かつてなかったことである。しかも最初にその電話に出たのが僕の妻で——由美ちゃんから電話よと僕に取りついたので、由美子と僕との情事を知っている妻の声は、たとえ平静を装つていても穏やかではなかった。

僕はいわば二重に狼狽させられながら、僕もしかしそれを平静で隠して、朝つばらからなんだと電話に出してみると、いきなり由美子が、

「先生？ あたし、切られちゃった……」

たゞならぬその声に僕は、うッと息を呑んだ。

「顔を、あたし、切られちゃったのよオ」

と尻あがりの声で由美子は言つて、あとは激しい咽び泣きにかわつた。

「誰に？ いつ？」

「昨夜遅く……。すぐ来て、先生。由美子んとこへ来て！」

涙で声がとぎれがちだつた。この由美子と僕は昨夜

——それは何時ごろだつたか、抽象的に言えばやはり昨夜遅く別れたのだが、あれからあのアパートに男が来て由美子の顔を切つたのか。

「アパートじゃないの。アパートは大丈夫なの。アパートで、あたし、待つてますから！」

「どこで、そんな……」

切られたのだ？ は言葉にできなかつた。

「代々木の家」

と由美子は言つたが、僕はその家は知らない。家の近くまで送つたことはあるが、その家へ行つたことはない。

「君は昨夜、アパートに泊らなかつたのか？」

アパートには、いつもやつぱり、泊つてなかつたのだなと、つい咎める声になつていて、

「あれから、代々木の家へどうして？」

「電話じゃ、いや。会つて、あたし、お話しします」

口をきくのが不自由らしいその声は、切られた顔が繃帯で固く縛られていることを僕に告げる。顔のどこを、どんなふうに切られたのだろう。

僕の胸は痛んだ。そこには狼狽もあつた。僕のほかに男があることを、由美子は僕に隠し通していたが、その顔を切るようなそんな深い仲の——大変な仲の男がやはり由美子にはいたのだ。それを由美子が今まで僕に、ひた隠しに隠していたことについて——今まで僕もそのことでは幾度も念を押したのだが、そのつど否定しつづけてきたことについては、由美子はこの期に及んでも、うそをついてごめんなさいの詫びはもとより、なんにもひと言も言わない。顔を切られた衝撃で、小さな女の心はいっぱいで、そんな余裕のないのは当然とも思えるが、僕の狼狽は、

「それで、相手は僕のことを知つてゐるの？」

と僕に言わせた。僕の言うその「相手」が由美子の顔を切つたのは、自分のほかに由美子が男をつくつた

のを知つての兇行にちがいない。

「先生とは知らないの。あたし、なんとなく、四人ばかり名前を言つといたんで、そのなかに先生も入つてゐることは入つてゐるけど……」

「四人？」

騒いでる僕の心に、嫉妬の暗い翳がさした。

「B社のOさんとか……出鱈目言つといたの」

Oさん？ これは僕も知つてゐるひとだが、由美子と特殊の関係があるうとは思えない。出鱈目であることは僕にも分る。僕は僕とOとを除く他の二人は誰々かと聞くことはしなかつた。それも出鱈目を言つたとすると、この僕だけがひとりだけ出鱈目でない。

その僕のために由美子は男から顔を切られるようなことになつたのである。しかし由美子は、僕に隠していた男のことについて僕に何も言わないかわりに、僕のために男から切られたのだと僕を咎めることもしないのである。そのことが僕に強く来た。

「とにかく、すぐ行こう。すぐ行く」

慰めるように力づけるように僕は由美子に言つて、

電話を切つた。

「やつぱり男がいたらしい。男に顔を切られたさうだ」

と僕は妻に言つた。

「まあ、可哀そうに……」

妻は泣きそうな顔をした。

「ちよつと見舞に行つてくる」

「行つてらつしやい」

と妻は由美子に同情したが、

「でも、これで、あなたも由美子さんと別れられるわね」

僕に背を向けて、妻は呟くようにそう言つた。

伊関君。

君と久しぶりに会つたのは、この朝、こうして僕が東京へ行くために、あたふたと乗つた横須賀線の電車のなかでだつた。

「悪魔研究会の忘年会は、とうとうやれませんでしたね」

年が改まつたら、ひとつ新年会をやろうと君は言つた。気が顛倒していた僕は、うつろな顔きをしているきりだつたが、この日は、忘れもしない、十二月二十七日である。

「香取君がそう言えば、陽子にすっかり夢中なようですね」

文芸評論家の香取が僕らの悪魔研究会に入つたのは、ほかならぬ君の紹介で、メンバーとしては一番新しいのだが、それがイの一番に「悪魔になつた」と君は笑つた。

悪魔研究会は、悪魔を研究する会というより、僕ら自身が悪魔を実践する会になりそうだと、メンバーのひとりの倫理学専攻の学者が、いつか、会の流れで銀座に出たときに冗談を言つた。君の言う「悪魔になる」はその意味だつた。香取は新進気鋭の評論家でメンバーのなかでは一番齢も若い。それだけに「悪魔になる」ことも一番早かつたのだろうが、またそれだけに心配だと君は言つて、

「夢中になるのもいいが、生活がなんだかメチャメチャなようだ」

研究会のメンバーはおおむね四十代の学者で、各大学のいずれも教授や助教授クラスというなかへ、まだ三十そこそこの、仕事もまだはつきりした形ものを示してない香取を入れるのは、どうかという話もあったが、君が彼の俊英を買つて推薦した。学者ばかりの

なかに、小説家は私ひとりというそうした私の孤立への配慮から、君は文芸評論家の香取を会に加えたところもあるようだ。僕は君を介して初めて香取を知つた。

その香取が陽子という女を知るようになったのは、これはいわば僕のせいなのである。

「香取君よりもこの僕が——僕の方が、すっかり悪魔ですよ」

と僕は君に言つた。僕等の前の座席には——この横須賀線ではいつものことだが、外人と日本娘のパンパンとが腰かけていて、傍若無人にふざけちらしている。この十年間、あきるくらい見せつけられ、見なれた風景なのだが、僕はどうしても見せることができない。僕はむかむかしながら、

「実は伊関君、銀座のバー・Rの由美子、あれから電話があつて——大変なことになつちやつた。男に顔を切られたというんですよ」

小聲のつもりだつたが、昂奮は僕の声を、前のパンパンにも聞える高さにしていたのか、女がびつくりした顔を僕に向けた。そのパンパンの小鳥のようなすばしつこい顔の動かし方は、由美子にそっくりだつた。

子供子供した身体つきも、そう言えば由美子に似ている。僕は溜息をついた。

「やつぱり、男がいたんですね」

いないわけではないのだ、そう言っている君の顔だつた。いないわけではないと僕にもかねて言つていたのに、僕はその君の言葉を受けつけなかつたのだ。

由美子は僕を欺いていたのだが、そのうそが遂にばれた。欺かれた僕は、やつぱり由美子はうそをついていたのだと怒つていいところかもしれない。だが、僕の耳には由美子の鳴咽がはつきりと残つていた。その鳴咽が僕を呼ぶ。僕を由美子の方へとひきよせて行く。

「これから僕は、由美子のところへ行つてみようと思うんですよ」

僕は僕の妻が何かというときすぐ涙を浮べるところから、女というのは涙脆いものだと思つていたのだが、この由美子は当然涙を見せていいときでも、断乎として、そう言いたいほど、かつて決して涙ぐむというこゝとさえしなかつた。一年近いつきあいのなかで、由美子が泣いたのは、今朝の鳴咽をも含めて、たつた三度だ——あのとき一度、そしてあの場合に一度と、はつ

きりそれを覚えていくくらいで、

(この子は実に泣かない……)

と僕にかねて、舌をまかせていたものだ。

その由美子が泣いたのである。その激しい鳴咽は由美子が初めて僕に真情を示したと僕に告げるのである。縋つてくる由美子の手を僕は払うことはできない。それに何よりも僕は由美子を愛している。

「あなたが、しかし自分で、ひとりで出かけて行くのは、考えもんですね」

と君は慎重に言つた。齡からすると僕よりずっと若い君が、僕に忠告するように言つた。これは、僕がえてして軽率なせいもあつてか、君は普段でもそうなのだが(思えば僕がノイローゼのときに、君がいろいろと僕の身を心配してくれた、あのときからの習慣かもしれないが)この場合はひとしお、僕の軽率を心配する口調で、

「ひとりで行くのは、どんなもんかな。放つておくのも、もちろん可哀そうだけど」

そして君は、明日なら一緒に行けると言つてくれたが、僕は電話で約束した以上、行つてみると言い切つた。

「そうですか」

と君は折れて、

「しかし、女の顔を切るなんて、どんな事情があるにしろ、ひどい男があつたもんだ」

「全く……」

僕らの常識からは考えられないことだ。そう僕が言う

と君は、
「顔を切るなんて、やくざのすることですね。これはやつぱり、相手はかたぎの男じやないな」

「やくざ? ああの由美子には、どうも男がいそうだという気はしてたんだが、まさか、そんなやくざみたい男がいようとは思わなかつた」

「まごまごすると、今度は、あなたが切られる……」

一年近くもつきあつていて——その前に更に一年、特別の關係に入る前の普通のつきあいの時期があつて、都合二年という長さにもかかわらず、由美子にそんな男のあることを僕が知らなかつたとは、それでも小説家かと君に笑われそうだ。社会学をやっている君は、社会心理については自分にまかせておいてほしい

が、人間心理——男女関係の機微については小説家の僕にまかせようと、いつも言っていたものだ。これでは僕は全く小説家失格である。

それだけ、由美子の欺し方がうまかつた——というより、僕の欺され方がうまかつたのである。そして僕の欺され方もうまかつたけれど、僕は僕自身をうまく欺していたのだ。

僕は自分で勝手に美化したイメージをつくりあげて、そのイメージでもつて由美子を見ていた。そのイメージがだんだんと、そしてしばしばこわされそうになつたとき、そのときこそほんとうの由美子というものが掴めるときだつたのに、僕は逃げた。イメージのこわされるのが、こわかつたのだ。こわすのはいいが、そのことから由美子が僕から逃げて行くのを恐れて、むしろ欺されていた方がいいと思つたのか。いや、もしかすると由美子自身が、僕を欺すというより自分を欺していたのだとも思われる。

あの由美子という女はどういう女か、いまもつて僕にはよく分らない。そもそもあの由美子に会つた最初にまで溯つて、あれはどういう女なのか、改めて僕は考えてみたい。

君はよく僕に、

「あなた方の小説には、なにかというと、バーの女が出てくる。他に女がいらないみたいだ。バーの女は、もういい加減にしてほしいですね」

と言つていた。君にはどうも恐縮だが、由美子はバーの女である。

僕にとつてしかし、由美子はバーの女というより——女である。

*

「ニュー・フェースの由美子さん」

とバー・Rのマダムが僕に由美子を紹介したのは、店の一隅にガス・ストーブの火がまだついていた季節だつた。寒がりやの僕は、ガス・ストーブの近くの席に腰かけていた。バー・Rはその一年ほど前に開いた店で、僕の友人がそのマダムをひいきにしていた関係で、僕もここへ来るようになったのである。

「こういうバーは勝手が分らないで、由美子さんも当分はトチつてばかりいるでしょうけど、可愛がつてあげて下さいな」

マダムひとりに喋らせていて、当の由美子はいたず

らをした中学生が先生に呼びつけられたみたいな顔をしていた。素人^{しらひと}っぽい感じだが、しかしズブの素人というのとも違うのは、そうやって口をきかないで立つていられるあたりに何か出ていた。はたしてマダムが、

「由美子さんは、あたしと同じような出の人なんですよ」

とちよつと照れたようにして言つた。マダムは昔、浅草のレヴィウ劇場で踊つていたことがある。

「やつぱり踊りの方？ どこに出てたの？」

と僕は尋ねたが、由美子は恥しそうに——ズブの素人の羞恥とはちがうそれで、顔を伏せた。舞台をやめてバーの女給になるということは、本人としては落ちたおもいに相違ないから、僕がそんなことを聞くのは残酷だった。

「歌が由美子さんは得意なんですつて。ね、そうね」

助け舟を出すみたいにマダムが言つたが、由美子はその身体つきからすると、歌手というよりやはり踊り子の感じだった。しかし踊り子としてはちよつと小柄だとも思えた。その由美子は、こういう場合、新参の女給が客に向つて言う、

「どうぞ、よろしく……」

を遂に、金輪際^{こんりんざい}、言わなかつた。

——ずつと後になつてだが、マダムは僕に、こんな話をした。

「由美子さんつて、ほんとに変つたひと。最初に、あたしとこへ来たときなんか、ほんとにびつくりしちやいましたわ。階段をトントンと男の子みたいにあらがつて来て、いきなり——あたしをここで使つて貰えますかつて、挨拶も何もなくて、いきなり、こうじやないですか。明日からお願ひしますわつて、こつちの方が度肝^{どきん}を抜かれて、ヘコヘコしちやつて。すると由美子さんたら——じゃ、さよならつて、またトントンと階段を降りてつちやうんですよ。こんなひと、うちで使えるかしらと思つたんですけどね。今になるとかえつて、個性があつて——この個性つて言葉は、由美子さんのおハコ」

「募集の札でも見て、いきなり飛び込んできたのかね」

「いえ、それはそうじやないんです。マリちゃんというひとの紹介で……」

「マリちゃん？」